

Title	スペイン語の強勢位置に関して
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 39 p.199-p.213
Issue Date	1977-03-15
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80670
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

スペイン語の強勢位置に関して*

出 口 厚 実

Some Remarks on Spanish Stress Rules

Atsumi DEGUCHI

This paper is concerned with some stress and related phenomena in Spanish phonology with the main aim of arguing against the claim that a general rule can correctly predict stress in Spanish. We attempt to show that Spanish stress is not assigned to abstract phonological representations, but each word has its stress specified in the lexicon. In short, it is claimed that the place of word stress is unpredictable from the segmental configuration without adding some ad hoc non-phonological apparatus to the grammar.

The assignment of stress in Spanish is a morpho-lexical process in the sense that it exhibits generative functions together with word formation and inflectional rules in the morphological component of a grammar, not in the phonology. Morphological rules also reflect the native speaker's ability of analyzing words into morphological constituents and they serve in some cases as redundancy rules. Similarly stress may be assigned redundantly to a word, given its surface segmental shape.

However, the phonologically significant facts about Spanish stress placement are the surface constraints on stressable syllables: the bearer of main stress is limited to one of the last three syllables with a vague hierarchy of markedness, being the least marked penultimate stress on a word ending in a vowel, and final on a word ending in a consonant.

It is interesting in this regard to note that in no words the antepenultimate syllable is stressed if there is at least one glide in the last two syllables, or the last syllable begins with a palatal consonant, [ɾ] or [x], or the penultimate syllable is closed. Some of the above conditions may be considered to be additional restrictions on stress placement in Spanish.

*本稿の一部は1976年4月17日大阪外国語大学で開かれた第14回関西スペイン語学談話会において、筆者が、“Stress in Spanish Verb Forms”と題して口頭発表したものである。

0. 西語において語中の限られた segment(s) がある種の音声的特徴の加重を受ける。この特徴の及ぶ範囲やその音響学的性質、とりわけ重要な問題である、音の強弱、音量、音調の諸要素のうちいずれが中心的な役割を果たしているのか、etc. についてなお未解明の部分が多いようである。^{注1} しかし、西語の話し手はこの音声上の prominence の所在とそれが弁別的機能をもつことを知っている。

小論はこのような超分節的音声特性すなわちアクセント（強勢）^{注2}の配置を西語文法の枠組の中にどのように位置づけるべきかについて考察する。

1. 標準的な西語生成音韻論はどの位置（母音）にアクセントが置かれるかを指示する強勢規則を設ける。例えば Harris (1969 : 121) の Stress Rules^{注3} (1)はその代表的なものである。

$$(1) \quad V \rightarrow [1 \text{ stress}] / \left\{ \begin{array}{l} \text{Co } (\tilde{V}C_0^1 (L)V) \text{ Co \#}_{N,A} \\ ([[-\text{perf}]] \text{ Co } V) \text{ Co \#}_{\text{verb}} \end{array} \right\}$$

ただし \tilde{V} = lax vowel

Campbell (1966 : 189) にも同様な考え方が見られる他、この方式は多少の修正を加えて Terrell (1970 : 69), Willis (1970 : 306), Wright (1970 : 251), Saciuk (1974 : 33) などに踏襲されている。これら諸氏に見られる語強勢のとらえ方をまとめて Pre-final Rule (略して PFR) と呼ぶことにする。Harris (1975 : 65) の規則は強勢を受ける単位が音節になっているので外観が著しく違うが、やはり PFR であることに変わりない。PFR は表面の音声に対してではなく音韻表示のある段階で、終りから 2 番目より前の母音に強勢を付与し、単音節語を除き最終母音にアクセントを与えないのを特徴とする。このアクセント指定のやり方は語末の e を消す Apocope Rule の仮定と表裏をなす。もう一つの特色は基底の母音に tense / lax の別 (Harris 1969, Willis 1970, Saciuk 1974), あるいは long / short の区別 (Campbell 1965, Wright 1972) を設け強勢と関連づける点である。当該方言において機能的対立に関与しない feature でもって基底音韻セグメントを区分することや apocope が許されるか否かは音韻理論の土台としてどのような基本的仮定をするかに係わるが、より厳しく規制された理論を求める本稿の立場からは PFR のアプローチは支持できない。

PFR は一部の動詞屈折形を除いて語末から左へ母音を数えることによって一定位置に強勢を与える。そして、西語のアクセントは少数の例外を除けばこの規則で predict されると主張する。筆者は a priori に、西語の強勢位置が予知されるべきものとは考えない。また prediction の範囲が大きい程、その rule が評価されるとも思わない。PFR は stress rule の一般性を指向するあまり、予想できない強勢位置をあたかもできるかのように定式化してしまった。西語の native speaker はある語を発音する時、どのようなプロセスでアクセントの位置を決めているのだろうか。すべての強勢が個々の音声単位を構成する不可分な一要素として記憶の中に貯えられていて、語の選択と同時に他の音声的弁別特徴に付随して出てくるとは考えにくい。例

例えば名詞 *casa* の発音の際に「強勢」 \acute{a} 、「非強勢」 \check{a} の2種類の母音を意識しているというより、むしろ $C\acute{V}CV$ の強勢形式が音声 segments の連続 [*kasa*] に結びついて後者にかぶせられたのではなかろうか。つまり強勢は個々の母音の特徴ではなく、語形全体の上に重ね合わせられる一種のパタンと考えてよいように思われる。しかし *papa*, *papá*; *sabana*, *sábana* 等、多数の対立が明らかに示すように、それはアクセントを特定の位置へ強制する力を持たないことに留意しなければならない。

2. [± tense] などの音韻素性を diacritic に使用して stress rule を強力に見せかける試みはどうやら失敗であったらしい。新しい Harris (1975) の PFR はこの feature を撤回したからである。それゆえ、ここでは Harris がなお堅持し続けているとみられる、apocope と強勢に関する主張に焦点をあわせて検討したい。

PFR は基底形に割合近い、派生の高い段階でかかる。強勢指定時に例えば *papel* は *papele* なる音形を有し、中間派生形 *papéle* を経て表層の *papél* に達す。その過程に音韻規則 apocope (2) が重要な働きを負わされている (Harris 1973 : 57)。

$$(2) e \rightarrow \phi / V \left[\begin{array}{l} + \text{cons} \\ + \text{cor} \\ + \text{voice} \end{array} \right] \text{ ——— } \# \left. \vphantom{\begin{array}{l} + \text{cons} \\ + \text{cor} \\ + \text{voice} \end{array}} \right\} \begin{array}{l} \text{Noun} \\ \text{Adjective} \end{array}$$

抽象的な語尾 *e* の仮定と、それを削除する規則は Harris (1970 : 928) に “I can think of few non-obvious segments and rules postulated for any language which are better motivated” と言わせる根拠があるのだろうか。その最大の拠り所は強勢規則の簡潔化、複数形成^{IE 4}及び $k \sim s(\theta)$ の交替らしいが、拙稿 (1974 b : 60~61) で批判したように *voz* の音韻表示を *vok-e* とする理由は見当たらない。理由がないだけでなく、この交替を音韻現象として、例えば Spirantization などの規則と同質視すれば音韻論の本質がボヤケてしまう。*voz* ~ *vocal* やこれに類する対語から、 $s(\theta) - k$ の対応が西語の話し手の心理に認められたとしても、この事実は *voz* の $s(\theta)$ が *k* から Velar Softening を受けて導出されるという主張を正当化するのに十分でない。

この問題は、結局、形態論と音韻論の境界線をどの辺に引くか、どのようなものを音韻論の規則として捉えるかにかかってくる。小論は Halle (1973 : 9), Vennemann (1794) の示唆にもみられるように、Lexicon は morpheme (root or stem と種々の suffix) のリストではなく、すべての完全な語形つまり屈折語の全 paradigm が記載されていると考えたい。^{IE 5} 語形成と屈折のプロセス及びそれに付随する音韻の修正を行う調整ルールは形態部門に属するので、音韻表示 (基底形) は、例外なく音声的に予測される余剰性のみを除いたかなり具体的なものとなる。一方、morphological rule は *papel-papeles* のような対に存在する変異を説明する redundancy rule としての性格を持つが、時に生成的な機能を発揮することもある。話し手が独自に造語を企てる場合、動詞や名詞・形容詞の屈折形を作り出す時などにこれらの規則を生成的に利用

するとみられる。同時に、形態規則は *native speaker* が直観的に持っている語の分析能力を表わしている。西語のような言語においては形態素は始原的な単位ではなく、任意な分析の結果得られる抽象物で、明確な *boundary* に区切られて心理的に実在するのではない。すなわち派生形態論では語はあくまで語を基として形成され、形態素の結合可能性が述べられるのではない。また屈折形は *root* と接辞の連鎖としてではなく一個の語として音韻部門に入る。*amamos* が *am* + *a* + *mos* と分折されてもよいが、後者から前者が作り出されるとは限らない。話者はしばしば *Lexicon* に出ている動詞屈折形の一つをそのまま、ふさわしい統語的環境に挿入する。

3・音韻論の規則は言語における音声単位の組成とそれらの結合様式に対する法則であるが、その基盤となるのは具体的な表面音声レベルにみられる許容可能性の体系である。ある規則によって引き起こされる構造変化が例外を持たず、*Surface Phonetic Constraints*^{注6} (SPC) に照して *motivation* がある事は必要条件であるが充分ではない。しばしば引き合いに出される西語 SPC として、語頭における *s* + 子音の不在がある。これに関する *prothesis* 規則(3) (Harris 1969 : 141) は一応の存在理由があるように見える。しかし(3)の存在から *#sC* を *underlying form* として *#esC* を導出することは妥当であろうか。

(3) $\beta \cdot \phi \rightarrow e / \# \text{ — } s [+cons]$

**sted, *stra, *stro, *storia* は表面音声形として当然許されない。そこで、これらを *usted, ostra, astro, historia* の基底形と仮定できないだろうか。SPC は語頭に補われる母音が *e* でなければならないと規定しない。記号数節約の見地から、あるいは歴史上実在した形を基準にしてどの母音を選ぶべきか決められるかも知れない。しかし、本稿はこのようなケースにおいてそれぞれの語頭母音が *underlying form* に存在するとみなし、基底形 *spada* から *espada* を導く音韻規則として(3)を認めないことにする。^{注8}

規則の適用順序については *extrinsic ordering* を排除し、普遍的原则で確立される部分的な *order* を除いてすべての規則は *unordered* であると仮定する。形態論の規則は随意的に発動されるが常に音韻規制の支配下にある。*suffix* や造語成分の境界は *morphology* 部門内で必要だが *Lexicon* への *input* の際、つまり形態論のルールが任務を果たした後、削除される。

4. 西語動詞形態の分析で一番の難題は *tómo, tomé, áme, amó* etc. の接辞に見られる *syncretism* をどのように扱うかであった。*tom* + *a* + *o* から *Truncation* で *tom-o* を導く規則を形態論の中に含めるのも一法であろう (Harris 1973 b : 37)。ただこの過程は Harris (1969 : 72, 1973 : 60) のように音韻規則とみなす理由がないことは明白である (cf. 拙稿 1974 : 57~8)。 *tómo* の派生の高い段階で *theme marker* の *a* と *person-number suffix* の *o* を仮定するためには予め統語素性の束を動詞の形態的構造に従って *segmentalize*^{注9} し配列して置かねばならない。*syncretism* に対する McCawley の提案 (1968 : 106) は形態素の連鎖 (そ

の音形)を破壊して、合体した feature を含む新しい segment を統語的に作り出し再び morpheme を挿入するが¹⁰, 無駄な重複を含んだこの迂遠なやり方を西語動詞のケースに採用することはできない。以上のような処理法の根底にあるのは suppletive を除き各形態素が一定の音韻行列でもって常に現われるとする考えである。小論は、むしろ、動詞本体に含まれる統語・形態的 feature から直接に syncretism 化した suffix を入れる立場をとる。前出の tom-o は「tom-(V), 1 人称・単数・直説法現在」が suffix の -o を得て形成されるとみる。実際、これが言語使用者の屈折に対してもつ直観に近いのではないかと推則する。

次に西語動詞形態論の見本として、規則変化 -ar 動詞の paradigm (定形のみ)をつくるルールを考えてみる。¹¹(4)の各式の左辺は屈折カテゴリーの略記で動詞の matrix の一部として含まれている。右辺の suffix には、= ‘root の右に付く’, + ‘suffix の左(右)に接する’などの隣接条件が示されている。従って(4) i) ~ xvii)は(5)の式型で表わされる規則を意味している。(4)の規則は無順序適用を受けるが、線でつないだ規則間には Proper Inclusion Precedence の原則¹²で部分的 disjunctive order が成立する。

- (4)
- i) Ind. Pres. 1sg → = o
 - ii) Ind. Pret. 1sg → = e
 - iii) Ind. Pret. 3sg → = o
 - iv) Ind → = a
 - v) Subj. Pres → = e
 - vi) Ind. Imperf → + ba +
 - vii) Subj. Imperf → + $\begin{Bmatrix} ra \\ se \end{Bmatrix}$ +
 - viii) Ind. Pret. 2sg → + ste +
 - ix) Ind. Pret. 3pl → + ro +
 - x) Imp. 2sg → + ϕ
 - xi) 2 sg → + s
 - xii) 3sg → + ϕ
 - xiii) 1sg → + ϕ
 - xiv) 1 pl → + mos
 - xv) Imp. 2pl → + d
 - xvi) 2pl → + is
 - xvii) 3pl → + n
- (5)
- $$\phi \rightarrow (+) P (+) \begin{Bmatrix} F_1 \\ F_2 \\ \vdots \\ F_n \end{Bmatrix} \quad \text{verb root} \quad X \text{ — } Y$$

ただし

+ : suffix boundary

P : phonological matrix

F : syntactic & morphological feature

5. 以上のような形態論と音韻論の枠組みの中でアクセントがどのように位置づけられるかを、まず名詞・形容詞の場合から見てみよう。(6)でA群の語とB群の語を較べれば、A/Bでは

- (6) A. libro, casa, tarea, grave
B. mamá, café, bambú, jabalí
C. azul, bondad, autobús, andén
D. árbol, lápiz, examen, crisis

Aの方が、C/DではCの方が普通に予想される強勢の位置である。そこで(7a, b)を

- (7) a. $V \rightarrow [+stress] / \text{ — CoV\#}$
b. $V \rightarrow [+stress] / \text{ — Co\#}$

仮の規則として設ける。(a, b)はこの順に disjunctive に適用され、(b)は単音節語にもアクセントを与える。両者は括弧を用いて次のようにまとめられる。音声 level に近いところで働く規則(8)が PFR の単純化した形である(9) (Foley 1967: 489)に比べて複雑であろうか。

- (8) $V \rightarrow [+stress] / \text{ — Co(V)\#}$
(9) $V \rightarrow \acute{V} \text{ — C}^{\text{H}} \#$

(9)を仮定するために払わねばならない語彙表示における多大な cost と ad hoc な音韻規則を考慮すれば、(8)の方が自然で合理的なとらえ方であろう。(6)B群のうち mamá, café は(9)の例外とされるが、bambú, jabalí に対しては bambue, jabalie の underlying form を設定して、(9)で与えられる "規則的な" アクセントを持つとみなされる。またD群の初めの3語は、強勢規則のかかる段階で arbole, lapice, examene であるから、PFR の例外にならざるを得ないが、crisis は(9)により最初の i に stress が置かれる筈である。しかしB, D群の各語あるいは一部の語を強勢に関して規則的な語として特徴づけるべきだろうか。

筆者は arbole の o に何らかの diacritic feature を与えアクセントが落ちない仕掛をして音韻的に例外でないかのように見せかける手段を認めない。árbol/carbol; fútil/sutil の対立はこれらの語に含まれる母音 o, i の性質から生じるのではなく、元々異った強勢形式 (— vs. —) を持っているのである。A, C 対 B, D の関係は規則と例外に2分されるのではなく、普通に予想され実際に頻度の高いものとその反対のもの、つまり Unmarked~Marked¹³の差として把握されるべきものである。さらに(10)のように antepenultimate (次々終)アクセントの語も珍しくない。

- (10) régimen, cálculo, pirámide, déficit

このように西語の強勢は純粋な音声的環境によって唯一的に指定される自動的アクセントでない。一方、強勢位置が語末に近い3音節内の母音に制限されている。従って、音韻論はこの事実

を表面音声制約の一つとして明示することができるが、許容される範囲のどの母音にアクセントを置かかを特定しない。また、この3音節であれば無条件でどこにでも **stress** が可能なわけではない。最終あるいは次終（**penultimate**）音節のいずれか又は双方に **glide** が含まれている語や、最終音節が〔tʃ, ʌ, n, y, x, i〕で始まる語には次々終^{注14}アクセントは見られない。さらに Harris（1975：58）が指適するように次終音節が閉音節である次々終強勢語はない。ここで興味深いのは、前記子音のうち〔x, i〕は先行開音節内の母音をあたかも閉音節にあるかのように開音化する音であり、残る4子音〔tʃ, ʌ, n, y〕は西語の硬口蓋子音の全てである点である。このような分布上の事実が音声的な制約と考えられるべきなのか、偶然の **gap** なのか充分明らかでないが、^{注15}西語の **stress** 位置に関する制約は 11) i) ii) に加えて、iii) をも含む可能性がある。

(11) i) 西語のアクセントは語末3音節のいずれか一つにある。

ii) 音節内では母音が強勢を受ける。

iii) 最終及び次終音節に **glide** を含まず、かつ次終音節が開音節で、最終音節が硬口蓋音や〔x i〕で始まらない時のみ、次々終強勢が起り得る。

6. 規則(8)で予想できない位置にアクセントを有する語はすべて語彙的強勢を受けるとは限らない。(12)のような特定の造語成分を含んだ語のアクセント位置は一定していて、語形成の際に形態論の規則でもって強勢が付与される。

(12) prólogo, biólogo, geólogo, filólogo,

kilómetro, termómetro, taxímetro, ----

(12) の -logo, -metro と同じく、先行直前母音に強勢を与えるものとして (13) があり、こ

(13) -ceo, -cuplo, -dromo, -fago

-fero, -fono, -fuga, -goto, -grafo

-imo, -locuo, -nomo, -paro, -sono

-scopo, -tesis, -tomo, -tono, -ulo, -voro

れらを成分として合成される語は少なくない。

-is で終る語は **anís** のように(8)に従うものの他、ギリシャ語源で非強勢の **i** を示す語が多い。**dosis, basis, sintaxis, oasis** は **dos + is, bas + is etc.** と分析され、形態アクセントの規則が+の前の母音に強勢を指定するとも言えるかも知れない。だが、+ **is** の場合は **boundary** の直前だけでなく、その前の母音が強勢化される語も存在する：**parálisis, análisis, génesis**。この矛盾は形態論の規則がただ + **is** の **i** が強勢を持ち得ないことを述べ、次終母音、次々終母音のどちらに強勢が来るかは **lexical** な要素とみなせば解決されるだろう。なお(11) iii) の制約があるので **anafilaxis, profilaxis, sintaxis, epistaxis, aproxis, epidermis etc.** は **antepenultimate** であり得ず **Ys** が与えられると自動的に次々終アクセントになる。(12)

上に見たような形態的な強勢規則は造語部門における機能のほか、 *redundancy rule* として利用されることもある。西語の使用者は、例えば (12) の語彙における強勢をすべて語別に暗記しているわけでないだろう。 *prólogo*, *kilómetro* を *lexical stress* として記憶していて、他の語は形態規則を利用して、音形のうゑに次々終アクセントをかぶせる可能性も考えられる。従って、語形成のプロセスを経ない場合、語は *lexical representation* において当初より強勢を指定されているが、分節的な (*segmental*) 音形の情報を基に、(8) その他の強勢ルールを用いて余剰的にアクセントの位置を知るケースが生じる。

(14) amé, amáste, amó, amámos, amásteis amáron
amába, amábas, amába, amábamos amábais, amában
amára, amáras, amára, amáramos amárais, amáran

— 206 —

るように語幹後の suffix の長さでアクセントを決めているという証拠はあるだろうか。動詞 suffix は閉鎖集合であって、実際 (16 a) の]st S - S に該当するのは Imperf の +ba +, +ra +, +se + の各 marker と +mos, +is の組み合わせ及び Pret の -steis を含む活用形である。Harris の規則 (16) は +ba +, +ra +, +se +, +ste + が弱勢であるために生じた、恐らく偶^レ然^レの、強勢分布を述べたもので (形態) 音韻的事実ではない疑いが濃い。二つのアプローチのうち、筆者はやはり (15) の方を選びたい。その理由は、(16 a) では am-é, am-ó etc. の融合した Pret 接辞のアクセントを説明できず、ama-I, amo-U 等、疑わしい underlying form を選定しなければならぬか、又は (15) に加え Pret の強勢を説明する別個の規則が必要になるからである。

(14) 以外の動詞の法時制に対しては、語尾の音形に従い最終あるいは次終強勢が付与される。ámas, amámos, ámes, amémos, áman, ámen etc. は (8) の一般的傾向に反し penultimate であるので次の規則が必要である。母音で終る語形 ámo, áma, áme, amándo, amádo は (18) で、子

$$(17) V \rightarrow [+stress] / \text{--- Co } V \left\{ \begin{smallmatrix} s \\ n \end{smallmatrix} \right\}$$

$$(18) V \rightarrow [+stress] / \text{--- Co } V$$

音末尾をもつ amád, amár 及び GC で終る amáys, améys は (19) で説明されるだろう。(17) (18) (19) は一つの規則 (20) にまとめられるが、これはまた (15) と disjunctive に連結されている。

$$(19) V \rightarrow [+stress] / \text{--- Co}$$

$$(20) V \rightarrow [+stress] / \text{--- Co } (V (\left\{ \begin{smallmatrix} s \\ n \end{smallmatrix} \right\})) \#]verb$$

8. 次に複数形成を例にとり実詞屈折と stress との関係を調べてみよう。辞書は単複両形 papél, papéles をそのまま記載するので、papel + s, papele + s, papel + e + s, papel + es のどれが正しい形態音韻表示であるかの議論は不毛となる。勿論、複数形は屈折規則で形成され得るが、語彙的形態素 (root) の右に複数 morpheme を付加し若干の音韻的修正を施すことによってではなく、表層音形を一定 ($-\overset{\vee}{V}s \#$) にするよう求める output 条件を満足させることによって得られると考える。¹⁹そして重要な点は複数化が単数形におけるアクセントの所在に左右されるという事実である。 $-\overset{\vee}{V}s \#$ を単数形で満している語はそのまま複数形として機能する (p. ej. lúnes) が、 $-\overset{\vee}{V} \#$ 語尾の語には s を付加し (p. ej. clase \rightarrow clases), $-\overset{\vee}{VC} \#$ に対しては -es が加えられる (p. ej. més \rightarrow méses)。

この種の形態論の現象をどのように定式化すればよいのか今の段階ではよくわからない。ただ複数化は名詞・形容詞の強勢位置に言及する必要があることは確かで、複数形の s の前に立つ母音が弱勢であることも形態部門で明らかにされるべき事柄である。言うまでもなく、この複数形成プロセスの一部に音韻上の motivation がある。そこから、複数形態素を -s とみなし、派生接辞として e を認めるか (Quilis 1968 : 133), epenthesis rule を設定する (Saltarelli 1970 : 72, Sánchez 1974 : 60, 出口 1974 a : 7) 分析ができるが、SPC は挿入母音が必ずし

も e であることを要求しないから、これは純粹な音韻的過程でない。^{注21}

9. Harris (1969) は西語の stress rules を循環規則とし、動詞の未来形、条件未来形 etc. の強勢位置が循環適用で説明されている。これらの屈折形が不定詞と haber 定形との合体で生まれた史的経緯の他、現に amar が独立の語形として存在することなど、[[amar] e] や [[amar] ia] のカッコ付けに根拠がないわけではない。しかし amaré/amára の違いは bracketing によらなければ明らかにできない性質のものでない。Hooper (1973: 26) をまつまでもなく、未来・条件未来の強勢位置がその marker である -r (V) から決まるとする分析は以前からあった。^{注22} 過去時制に見られる morphological stress と同様に、-r の直後の母音を強勢化する規則が不当だとは思われない。この点で cyclic rule の論拠は弱く、動詞形の他に循環的にしか説明し得ないアクセントの現象^{注23} が西語にあるか、第2・第3強勢が弁別的な機能を持つか、etc. の検討を待つ必要がある。cyclic, non-cyclic いずれに解釈するべきか、筆者は今のところ決定的な論拠を見い出せない。

10. 母音に隣接する非強勢高母音は glide になると一般に言われ、Harris (1969: 24) は次の規則をあげている。^{注24} だが、表層のすべての glide が (21) に源を持つのではなく、

$$(21) \quad \begin{bmatrix} V \\ +\text{high} \\ -\text{stress} \end{bmatrix} \rightarrow G / \left\{ \begin{array}{c} \text{---} V \\ V \text{---} \end{array} \right\}$$

underlying segment としても high glide y, w が存在するとされる。もし Glide formation (21) がアクセント指定以前にも適用されるならば aire, causa, peine, deuda 等の基底形における次終 [-cons] segment を母音 i, u と表記することができる。この点から Brame (1972: 71) は (21) を cyclic rule とみる案を示している。このような segmental cycle を認めるのに妥当な内部構造があるか否かを別にして、彼は (21) をそのまま受け容れているので問題がある。(21) は次の語に見られる半母音化しない非強勢高母音の存在を予知しない。

(22) bjenio, diálogo, cliente, actuó hui

少なくとも注意深い発音における [pyé] ‘足’; [pié] ‘ピヨピヨ鳴いた’の相違は強勢の有無ではなく、\$pié\$ に対して \$pi\$é\$ すなわち音節境界^{注25}の位置が glide 化の条件になることを示すのではないか。そこで (21) に代えて (23) を仮定する。[byénio] の発音もある style では見られるから、高母音と母音間の syllable boundary を削除する双向性のルールがある。

$$(23) \quad \begin{bmatrix} V \\ +\text{high} \end{bmatrix} \rightarrow G / \left\{ \begin{array}{c} \$Co \text{---} V \\ V \text{---} Co\$ \end{array} \right\}$$

$$(24) \quad \text{Mirror image} \\ \$ \rightarrow \phi / \begin{bmatrix} V \\ +\text{high} \end{bmatrix} \text{---} V$$

word boundary が取り払われた後で (24) がかかると再び (23) が適用されるが、この時でも [-stress] に言及する必要はない。(25) で *ú*, *í* が glide にならないのは (11) ii)

(25) *tú irás* [túy \$rás], *mi uva* [myú\$ba], *su hijo* [swí\$xo], *vi uvitas* [víw \$ bí \$ tas]

の制約により *w*, *y* があり得ぬためである。また *comí uvas* [ko\$mi\$ú\$bas] のように強勢母音が連続する時も 1 音節内に 1 母音という音節条件によって (24) は block される。

半母音化, 強勢, 音節境界は互に絡みあっていて、どれが他を条件づけているのか見分けがたい。例えば *aire* [áyre] の派生について (26) にみられるように何通りかを想定することができる。

- (26)
- | | | | | | |
|-------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| | (α) | \rightarrow | (β) | \rightarrow | (γ) |
| 1. | <i>áire</i> | | <i>áyre</i> | | <i>áy\$re</i> |
| 2. a. | <i>ayre</i> | | <i>áyre</i> | | <i>áy\$re</i> |
| b. | <i>ayre</i> | | <i>ay\$re</i> | | <i>áy\$re</i> |
| 3. a. | <i>ai\$re</i> | | <i>ái\$re</i> | | <i>áy\$re</i> |
| b. | <i>ai\$re</i> | | <i>ay\$re</i> | | <i>áy\$re</i> |

(26) 1. はアクセント位置が語彙的に決まっているとみる。これ自体、唐突な解釈ではない。実際、地理的・社会的変異として存在する *baúl* ~ *bául*, *país* ~ *páis*, などは stress 位置の違いと考えるのが一番自然である。しかし、上に指適したように強勢の不在は glide 化を規定していない。2. の分析は underlying segment として *y* を認めているが, a (β)-(γ), b (α)-(β) の変化は 1. (β)-(γ) と同様、事実を正しく反映していない。なぜなら, glide ゆえに音節の境界が決まるのでなくて、むしろ syllable boundary を条件にして glide, i.e. [-syllabic] の状態が生まれるからである。3. の音節構造が与えられれば (23) の適用で *y* が得られる。ただ語彙項目の特性として *aire*, *país* がそれぞれ *ai\$re*, *pa\$sis* と分節されるように指示されなければならない。^{注27} 第4の方法として、母音に接する [-cons] segment における [U syllabic] を [-syllabic] に解釈する Marking convention を仮定することも可能である (Cressey 1975 : 39)。しかし、word boundary を越えてわたり音を形成する (21) に似た別のルールが要求される。

本稿は以上の様々な見方のどれとも一致しない立場をとる。(23) の存在は同一音節内で母音に接する高母音を半母音に変えることのみが目的なのでなく、同一音節内で 2 母音が許されないこと, glide と vowel ならば両立することを示していると読まれるべきである。この制約でもっていずれ半母音に変えられる筈だからといって同一音節内に 2 母音連続を音韻レベルで仮定するのは便乗の先取りである。従って [áyre] の *y* のように母音と交替しない segment をわ

ざわざ [i] から導出する必要はない。¹⁸²⁸ aiの母音連続に対して, a\$ i , \$.....ai.....\$ の2種類の分節法がみられるのでなく a\$ i , \$.....ay...\$ の sequence が西語に存在し \$...ai... \$,...a \$y\$.... が排除されると理解する。

さて、アクセントと音節境界・glide との先行性はどうだろうか。強勢は音韻規則として付与できないことを見た。また音節境界（従って glide ）も部分的に語彙的に決定される。この意味で両者には支配関係がない。肝要なのは、[+stress] と [-syllabic] は相容れない、また同一音節内で2つの [+syllabic] が連続しないという2つの表面構造条件を、音節境界・glide・強勢の共起性を拘束する factor として認識することである。これらの条件は stress と音節構造に関する一般的な制約として述べられるものの一部である。西語の話し手は常にアクセントの位置を何かから推定するとは限らないが、音節境界、母音・半母音の区別などを含めたセグメンタルな音声的特徴、統語・形態論に関する情報を手掛りにして、それを余剰的に知る場合があろう。しかし、このことは ay\$re の如き強勢についての特性のみを欠いた音韻形式、あるいは強勢の分布を知るのに最底限必要な音韻的特徴をもつ表示（の段階）が実在しなければならぬことを意味しない。

おわりに

西語の強勢は語の音声的環境によって決定されるのではない。語彙項目の特異性に帰される語彙的強勢と形態論のルールで支えられる可能性をもつ形態的強勢は、unmarked な stress, i.e. 母音で終る語の次終母音、子音で終る語の最終母音を強勢化する規則に対する例外として扱われるべきでない。後者は前二者の elsewhere という意味で morpholexical な性格を持ち、同じレベルで働く。他の morphological rule と同様、実際に語形成が行われる時及びこれを余剰規則として強勢の推定がなされる時のみ発動されるのであって、通常は強勢位置を予め指定されている lexicon の各項目が利用される。音韻論上有意義でかつ重要なものは (11) のような強勢に関する表層制約がスペイン語にみられるということではなかろうか。

(July 26, 1976)

〔注〕

1. 西語アクセントの音声の実体に関する議論については Quilis (1971) が詳しい。
2. 本稿は‘語’のいわゆる主強勢 ‘primary stress’ にのみ関心をもつ。標準カスティリア方言における強勢を扱うが、引用部分の中にはこれと実質的に差のない他方言のものも含む。
3. この規則の原型は、Campbell (1966 : 112) によれば James Foley の ‘Spanish Verb Endings’ unpubl. paper (Cambridge, Mass. 1964) で提案されている。
4. 出口 (1974 a) , 本稿 § 8 参照。
5. この方式をとるためには標準的な語彙挿入を改めて、統語・意味素性と形態・音韻素性を切り離し、異った段階で挿

入する方が望ましい。すなわち後者は統語変形の済んだ後の *surface structure* に導入されるとみなす。

6. 音節構造に関する条件も含まれる。
7. #sC の音形をもつ借用語や外国語の発音に e が挿入される事実を e epenthesis の evidence と見る人もある：
esquí, esnob, espé(i)n (=Spain) しかし、native speaker が完全に [+native] の語、p.ej. España に対し耳
馴れない *spaña という underlying form の意識をもっていて、ちょうど外来語を発音する時と同じように e を挿入
すると仮定するのは奇妙であろう。
8. Hooper (1973 : 107~8) は Syllable Structure Condition と挿入母音の選択に関する普遍の原則で自動的に e が
挿入されると主張する。これが正しければ前注の外国語発音を説明できるが native word に #sC の基底形を認める
ことと無関係である。
9. この例については Harris (1973 b : 34, 1975 : 63) を見よ。
10. Foley に影響されてか、McCawley は西語の “Preterite & 2 pl” という形態素の結合が自ら提案する syn-
cretism の方式によらず、purely phonological rules で正確な音声形に変えられると述べるが、これは全く見当は
ずれの主張である。
11. Ind ‘直説法’, Subj ‘接続法’, Pres ‘現在’, Pret ‘過去’, Imperf ‘不完了過去’, Imp ‘命令’, 1, 2, 3
‘1・2・3人称’, sg ‘単数’, pl ‘複数’。未来及び条件未来形は不定詞と haber の結合から導かれる可能性が
あるためここに含めなかった。第9節。
12. Koutsoudas, Sanders & Noll (1971 : 10)
13. (6)A ~ D, (10)の間で markedness の階層があるように思われるが、正確な規定が可能かどうかよく分らない。
14. ventrílocuo のような -locuo を含む語, apófige, rémige など少数の例外がある。
15. 硬口蓋音や [X] の発生が、消滅した先行音節（内子音）と関連することが跡づけられるという意味で歴史的偶然
かも知れないが、通時音韻変化の結果、systematic に生じた空白である。
16. これらの法・時制が共有する素性 [+past] が強勢の決定に係わるとする見方 (Hooper 1973 : 25) もある。なお
vino, dije, puso などの 1・3sg を含む強化過去動詞に対しては後出 (20) が適用されるだろう。
17. y は第2・第3活用動詞に現われる：com(y)eron, viv(y)eron。
18. (16 a) は syllable を用いない形で Harris (1973 a : 73) が示したものと実質的に同じである。Non-verb 用の
規則としては次のものが提案されている (p. 59)。

$$V \rightarrow [+stress] / \bar{S} - Co [X] S \# \Big]_{\alpha}$$

X : abstract diacritic feature
α : all stressable categories other than verbs

19. 出口 (1974 a)
20. 最終母音が非強勢でなければならぬという条件は最近の口語で緩和される傾向にある (Quillis 1968 : 132, 出口1974 a
: 10)。
21. 注8 参照

22. Reiff (1963 : 82), Garde (1972 : 118)
23. Brame & Bordelois (1973 : 165), Brame (1974 : 55) は - mente 副詞の強勢が cycle で説明されると主張するが, data の解釈に問題があって説得力を欠く。
24. この規則は Mirror Image Rule の Convention を用いて簡約化できる。ただ 2 つの subrule の間の order は (21) に示されるような厳密なものでない: [rwín ~ rúyn], [byúda ~ bíwda]。しかし完全な free variation と言えるかどうかは疑問である。
25. 音節境界 \$ は普遍的な, また個別言語的な規則で挿入されるものとする。
26. Harris ならば [[pi] _N^e]_v vs [pye]_N と分析し前者の \tilde{I} を cycle で説明するであろう (cf. 1969 : 126)。この種の最小対立は稀でまた不安定だが Academia (1973 : 49) は Mariano [人名] / mari.ano [形容詞 : '聖母マリアの'] をあげる。
27. Marking Convention を設けて前者の方が unmarked な分節法であることを示すこともできる。
28. これは [syllabic] の指定が blank の archi-segment から, y が導かれる可能性を否定するものではない。

REFERENCES

- Brame, Michael K. (1972) : The segmental cycle. - Contributions to Generative Phonology, pp. 62-72
- (1974) : The cycle in phonology. - Linguistic Inquiry 5, pp. 39-60
- Brame, Michael K. and Ivonne Bordelois (1973) : Vocalic alternations in Spanish. - Linguistic Inquiry 4, pp. 111-168
- Campbell, Richard Joe (1966) : Phonological analyses of Spanish. Ph. D. Dissertation.
- Cressey, William W. (1975) : Spanish glides revisited. - 1974 Colloquium on Spanish and Portuguese Linguistics, pp. 35-43
- 出口厚実 (1974 a) : スペイン語における複数形成について—大阪大学報 No. 30, pp. 1-14
- (1974 b) : スペイン語動詞の形態音韻的側面— HISPANICA 18, pp. 51-68
- Foley, James (1967) : Spanish plural formation. - Language 43, pp. 486-493
- Garde, Paul (1972) : El acento. Buenos Aires
- Halle, Morris (1973) : Prolegomena to a theory of word formation. - Linguistic Inquiry 4, pp. 3-16
- Harris, James W. (1969) : Spanish phonology. Cambridge, Massachusetts
- (1970) : A note on Spanish plural formation. - Language 46, pp. 928-930
- (1973a) : On the order of certain phonological rules in Spanish. - A Festschrift for Morris Halle, pp. 59-76
- (1973b) : Second person plural verb forms and other questions of phonology and morphology in Spanish. - Revista de Lingüística Teórica y Aplicada 11, pp. 31-60
- (1975) : Stress assignment rules in Spanish. - 1974 Colloquium on Spanish and Portuguese Linguistics, pp. 56-83
- Hooper, Joan Bybee (1973) : Aspects of natural generative phonology. Indiana University Linguistics Club
- Koutsoudas, Andreas, Gerald Sanders, Craig Noll (1971) : On the application of phonological rules. Indiana University Linguistic Club
- McCawley, James D. (1968) : The phonological component of a grammar of Japanese, The Hague

- Quilis, Antonio (1968) : Morfología del número en el sintagma nominal español. --Travaux de Linguistique et de Littérature 4-1, pp. 131–140
- (1971) : Caracterización fonética del acento español. - Travaux de Linguistique et Littérature 9-1, pp. 53–72
- Real Academia Española (1973) : Esbozo de una nueva gramática de la lengua española. Madrid
- Reiff, Donald G. (1963) : A characterization-evaluation system for theories of Spanish verb morphology. Ph. D. dissertation.
- Saciuk, Bohdan (1974) : Spanish stress and language change. - Linguistic Studies in Romance Languages, pp. 28–37
- Saltarelli, Mario (1970) : Spanish plural formation : Apocope or epenthesis? - Language 46, pp. 89–96
- Sánchez, Rosaura Arteaga (1974) : A generative study of two Spanish dialects. Ph. D. dissertation.
- Terrell, Tracy Dale (1970) : The tense-aspect system of the Spanish verb. A diachronic study on the generative transformational model. Ph. D. dissertation.
- Vennemann, Theo (1974) : Words and syllables in natural generative grammar. - Papers from the Parasession on Natural Phonology, pp. 346–374
- Willis, Bruce (1970) : Stress assignment in Spanish. - Studies presented to Robert B. Lees by his students, pp. 303–312
- Wright, James Richard (1972) : Spanish verb morphonology. Ph. D. dissertation.